青春人類

ニュータイプ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
青春人類

【Ｎコード】
Ｎ７９７７Ｙ

【作者名】
ニュータイプ

【あらすじ】
妄想大好き夢見がち、楽しければいい高校生こと工藤。男の中の男に憧れる、妙にスペックの高い高校生こと竹田

高校２年の夏、竹田は謎の活動の開始を宣言した。意味があるのか無いのか、さっぱり分からないが、たぶん何かあるんだろう。

初小説です。生暖かい目で見守ってください。誤字、脱字とかあっ

たら言ってくれると嬉しいです。

7／11

「工藤、じゃあ明日また学校でな」

そう言うと竹田は、僕の帰る道とは反対方向へ進んで行った。

時刻は夜の9時を回ったところである。

「しかし、今日は暑かったな」

僕はそんなことを思いながら、自宅への帰路についたのだった。

僕こと、工藤と、我が友人竹田は同級生であり、同じクラスで、いわゆる「親友」という仲である。

高校2年生である自分たちは、青春真っ盛りの年頃なのだろう。世間一般的には。

周りの友人たちは部活動に励み、早いやつは大学への準備をしている。なんて真面目なんだ。

そんな中で僕らは、学校が終わると寄り道をしては、遊ぶことに情熱を注いでいるのだ。

最近では自分たちの街では知らない場所は無いと言えるほど、町を知り尽くしたと言っても過言ではない。

街案内などさせれば、自分の能力を最大限に発揮することができるのでは？と思っている。さすがに言い過ぎかもしれない。

まぁあまり役にたたない知識ではあるが。

もちろん、自分たちの他にも遊ぶ仲間は居るが、僕と竹田はいつも遊んでいるように、周りには見えるのではないのかと思っている。

言っておくが、僕も竹田も、学校でハブられているとか、そういうことは無い。ましてや同性で愛しているなどということもない。友達からホモダチになるなど勘弁してほしい。

ともかく、僕らは僕らの健全な青春を過ごしているのだと自負している。

話は変わるが、今日の僕は素晴らしく運が良いと思っている。朝起きたとき寝癖が無かった、熟睡できた（ような気がする）、学校では忘れ物も無く、授業では当てられず、隣のクラスの美人の女の子と話すことができた（重要）。　おまけにゲームセンターでは竹田に格闘ゲームで勝利を収めた（僕と竹田の対戦成績は２０回に一度勝利を収めれば良いほどだ）

うん、中々のラッキーデーだったと思う。　一か月に一回あれば良いほうだ。僕の中では素晴らしい一日と成っただろう。

他人から見れば、小さいやつだと思われるかもしれないが。

と、まぁ、そんなことを考えて歩いていると、家まであと十五分ほどの距離まで来ていた。

しかし僕は考えた。

このまま真っ直ぐ家に帰って楽しいか？

家に帰ってやることがあるかと聞かれると、戸惑ってしまう。趣味は何ですかと聞かれると、困ってしまう。

そう、僕は他人に誇れるような趣味を持ち合わせていないのだ。

読書は趣味だが、さすがにありきたりすぎる。

後は、散歩が唯一の趣味だが、話題性の乏しい趣味であり、僕の周りでは散歩が趣味の人間など存在しない。

いるのかもしれない、名も知らぬ誰かと散歩の良さについて語り合いたいものだ。

と、僕は迷ったあげく、寄り道をすることを決意した。　趣味は寄り道をすることです、といつか誰かに答えたい。

僕の家は住宅街の一角に位置している。

この住宅街の隣には、森林公園があり、僕が今いるのがそこだ。この森林公園、中々広いのだが、いつも人は少ない。理由はわからないが、管理不足が原因だろうと工藤は考えている。

街頭はなく、雑草の手入れも最低限しか行っていないからだ。

薄暗い森は月の光に照らされて、視界は僅かといったところだ。

とにもかくにも、僕は森林公園を歩いているのだが、視界が悪い。聴こえる虫の声と、カエルの声は新鮮に聴こえるのだが、視界が悪い。町に文句を言ってやるべきだと僕は思った。

まぁ、思うだけで実行になど移さないのだろうが。

薄暗い中を歩くのは中々勇気のいることだ。

というか怖い。

今更ながらに後悔している。

竹田でも連れて来ればよかったと思ったが、なんだか竹田は頼りにならなさそうなのでパスだ。

ホラー映画とか苦手って言ってた気がしたし。

かくいう僕もホラーやオカルトの類は勘弁して頂きたい。

しばらく歩くと、遊具やベンチが置いてある場所にたどり着いた。公園の中では唯一ここだけが活気あふれる場だ（昼間に限る）。

僕はベンチに腰を掛け、一息つくことができた。　時刻は９時４０分をもうすぐ回るところだった。

この公園には川の流れている場もあり行こうと思ったが、僕は一瞬でその考えを捨てた。

怖いし。

暗闇の中、川に行くとか、自殺行為もいいところだ。

子供のころ、親に川に近寄ずくなと言われたことがある。　この辺の子供はみんな同じようなことを言われているらしいが、真意は不明だ。

そういえば、あの川で釣りをしている大人を見たことがない。何も釣れなさそうな川だが……

時刻はもうすぐ十時を回る。

そろそろ帰宅の時間だ。

僕は重い腰を上げ、空を見上げた。町の中から見える景色とは違い、ここから見る星は、素晴らしく綺麗に見えた。星の数も多く見え、なんだか感動的だ。

7月11日、月曜日　晴れ

僕の高校2年生の夏が始まったのだった。

7／11（後書き）

初めまして。うん、書くのって難しいね笑。もっと上手い描写使えるようになりたい。

7／12

暑い夏の朝、僕は家を出た。

家を出て、降りそそぐ日差しは気持ちのいいものだが、暑すぎるのはやめてほしいものだ。太陽に文句が言えるのなら言いたい。それで太陽が日差しを自重してくれるなら、僕は太陽にいくらでも願うだろう。

セミの声を聴くと夏の訪れだと思うのは、僕だけだろうか？

僕の家の近くは森林公園があり、緑が豊富なので、よけいにうるさく感じる。

セミの声がうるさいと言うのは、失礼かもしれないが、これから学校へ行くときに鳴かれるのは迷惑極まりない。朝にセミの声で起こされるのは本当に勘弁だ。しかし、短い命の中で懸命に鳴くセミに対して「うるさい」と言うと、セミ愛好家の皆さんに怒られるかもしれない。もしくは、学校の生物担当の教諭辺りが出てきて、セミについての知識を披露され、セミの偉大さを脳に叩き込まれるかもしれない。

などなど、愚痴ってもしかたないのは分かっているが、愚痴られずにはいられないのが、自分なのだろう。

もっと、こう、風情のある場所でセミの声を聴きたいと思うのは贅沢なのだろうか。

実際、風情のある場所ってどこ？と聞かれても分からないのだが

……

登校時は延々と頭のなかで妄想を広げていく。

妄想するということは、人間に与えられた最高の行動だと思っている。僕は自分の都合のいいことばかり考えている。そして出来もしないことをひたすら考える。唯の夢見がちな少年だ。

そして、いつか現実に引き戻される。

学校へと歩く道は、ひたすらに気だるい。

暑くて暑くて、流れる汗が背にべたつく。

日傘でも差して歩きたいものだが、男子高校生でそんなことをしている人間など見たことがない。もしかしたらどこかに居るのかもしれないが、少なくても僕は見たことが無い。だいいち僕一人が、晴れた夏空の中、傘を差して歩くことで、日傘ブームでも作れないものだろうか。そうすれば快適な登校が出来るのは間違いない。いや、もしかしたら、僕の行動が高校だけでなく、もっと大規模で有名になるんじゃないか？そうすれば一番最初に開発した人間として僕は有名になって、それで、それで……

考えが飛びすぎた。

現実に戻るんだ。

現実が僕を呼んでいる。
早く正気に戻るんだと。

早く秋が来て、涼しくなればいいと思う反面、夏の景色をもっと楽しみたい自分がいる。具体的には思春期の変態的な考えだ。所詮ただのエロい妄想だ。
水着とか好きだし。

男子たるものしかたないじゃないか、との主張は、女性の方々には受け入れてもらえないのだろう。

などなど考えて歩いているうちに、長身の人影が見えた。

竹田だ。

あいつは遠くから見ても目立つ図体をしている。１９０センチを超える身長に、肩幅も広く、筋肉質な体をしている。

僕の高校には、竹田の他にあれほどデカい人間は居ない。

竹田のことを少し紹介しておくと、竹田の運動神経は半端ではない。２年生のこの時期になっても、部活の勧誘をたびたび受けてい

る。どの運動をやっても、運動部に引けを取らない実力を見せるからだ。

「助っ人」などという名目で部活に引っ張りだこにされている。

そして、運動神経抜群、男らしい凛々しい顔つき、性格の良さ。女子生徒の憧れの人物だ。学業の方はまぁ、あまりよろしくないが、バランスを保っているということなんだろう。

というかそうであってほしい。

学業まで良かったら、他の男子の立つ背がないというものだ。

僕は小走りで竹田の歩いている地点まで駆けていった。

「おはよう、竹田」

「おぉ、おはよう、工藤。今日も暑いな」

竹田の顔を見上げると、彼はずいぶんと汗をかいていた。

かくいう僕も、同じぐらい汗をかいているのだろうが。

「今日は一人で登校か？」

「ん？あぁ、今はフリーになったからな」

「フリー？　おまえ……今回はどれぐらい続いたんだよ？」

「あー、一か月……いや、ぎりぎり二か月いったかな」

僕はまたか、と竹田に対してあきれた視線を送った。この男、彼女を作っては別れ、作っては別れの繰り返しなのだ。よく飽きずに彼女を作れる、というかなんでそんな簡単に彼女を作れる。

彼女といっても、竹田は基本的には放課後は僕や他の男子生徒と遊んでいるため、本当に形だけだったりする。

休みの日に遊びに出掛けに行っているらしいが、愛想をつかして別れる方は数多い。

「おまえさー、もう少し相手のこと考えてやれよ。毎回言ってるけど」

「いやいや、今回はオレからな、関係を辞めるというか、別れを切り出すというか、そんな行動をしたんだよ」

「え、マジで？珍しいな。お前はいっつも放置して、相手を怒らせる人だろ」

「……工藤はオレのことどーゆう目で見てんだよ。単純に性格だよ」

「……へぇ。とりあえず付き合ったけど、性格悪くて私の手には負えませんでした、とか言うなよ」

「そうそう、それそれ。今回の子はオレに合わなかったんだよ」

「いつものことじゃないか。お前に合う女の子っているのかよ！」

「いやいや、工藤よ、そりゃもちろん居るだろ。ただオレは妥協したくないんだって、いつも言ってるじゃん。今回は可愛い子だったんだけど、性格がきつい子だったんだよ。オレは理想を求めたいからな、容姿は良かったけど、これ以上付き合うのは止めたよ」

「……理想はいつものアレか？変える気ないの？」

「あぁ。今のところは変える予定なんて無いな」

竹田は実に堂々と答えた。

竹田に聞いたことがある、理想の女性像。料理が上手で可愛くてモデル体型で性格が良くて世話好きで髪が綺麗で長くて自分の意見を尊重してくれるような人と、付き合いたい。

かなわないと思うが、せいぜい理想の女性探しをしてくれ……さすがに無茶苦茶だ。妥協しろ。

こんな人間存在するなら見てみたい。

存在が証明されて、竹田がお付き合いに成功したら、僕は竹田に土下座をして、何かを謝ろう。何を謝るかは謝ってから決めてやる、だから地面にゴリゴリと頭をすりつけて謝ってやろう。

そんなこんな話している内に学校の前まで来た。今日もまた学校が始まる。

7／12（後書き）

上手く書けてんのかな……

7／12？

「暇な時間を有効活用するには、どうすれば良いと思う？」

突然、竹田がそんなことを口にした。

現在位置は学校、教室、時刻は昼休み

「さぁ？また彼女でも作るために、行動すれば良いんじゃないのか？」

実際こいつの場合、行動などしなくとも向こうから寄ってくるという素晴らしいスキルを持っている。

何と羨ましい。

オーラでも出ているのか？フェロモンでも大量に流しているのか？

ともかく、放って置いても自然と向こうから寄ってくるような体質のやつに、僕がアドバイスするなど出来るわけがないのだ。

というか、こんなデカブツの何処が良いか甚だ疑問だ。

もっとこう、細身の、華奢な体系の方が良いと思うのだが。

竹田が語るには、喋りでカバーしている自信があるとか言っていたが、その話術を是非講義してもらいたいものだ。

「いや、女は良いんだ。何かこう、楽しいことをしたいんだよ。分かるだろ？」

知るか

僕は女の子と遊びたい。ベタベタな感じのデートをしたい。

「女の子と遊んでた方が楽しいだろ。また理想か？」

「まぁそうだな、理想だ。だいたい、以外と楽しく無いものだぜ。実際遊んでみれば分かるよ」

「…嫌みか？嫌みだな？嫌みなんだな？」

「工藤、顔、怖いぜ。悪かった。けどお前は普通に彼女できそうだけどな」

「……お前と正反対の僕が？」

「あぁ。女受け良いじゃん。男受けもいいけど」

女受けが良い、これは良い。男受けが良い、これが僕の問題、ちょっとしたコンプレックス。

というか僕が一番気にしているところ。

身長１５５センチ、体重４８ｋｇ、童顔。

ただのチビだ。

いや、僕も努力しているのだ。身長については正直諦めている。顔も整形でもしない限りかっこよくなどならない。

高校に入ってからの僕はいろいろと変わったのだ。ひたすら男っぽいものに憧れていた時とは違う。自分の立ち位置というか、どうすれば上手いことやっていけるかが少しずつ分かってきたのだ。

今の僕は、持ち味を最大限に生かすようなアピールをしている。

その結果が、肩ぐらいの長さのショートカットとダメージの少ない黒髪、ニキビの無い白い肌。

僕は一時期、進む方向を間違えたと思ったときだってあったさ。

しかし、今では自分の容姿に満足というか、快感を得ている。特に、自分よりケアをしていない女性を見ると、内心「勝ったな」などと、しょっちゅう思っている。

まぁそれでも女の子大好きな訳だが。

しかし悲しことに僕は恋愛対象ではないようだ。男らしさなんか、全くないからね、僕。

それでもいつか、かならず僕の魅力にきずいてくれる素晴らしいレディが出てきてくれることを祈っていよう。

「男受けとか言うな。マジで視線が気持ち悪いんだよな」

「いや、ジロジロ見たくもなるぜ。それか、ほら、日本人特有の他人のことを観察してしまうアレ」

「風習っていうか、そういう傾向はあるけどさ……。まぁ見られてて気分のいいものではないな。で、楽しいことしたいんだっけ？」

「そうそう、夏休みも近いしな。なんかおもしろいこと捜してんだよ。時間を長く使ってできること、みたいな」

結構困る質問だ。得に僕みたいな無趣味のやつに、おすすめ出来ることなんてないんだが……。とりあえず僕は思ったことを言ってみることに。

「楽しいことなんていくらでもあるんじゃないかな？自分が楽しいって思えることがそれだし。僕はつまんないって思うことでも、面白くするのが重要だと思うんだ。だから何でもいいから興味のあることとかに手をだしてみたら？そうすれば、面白いことが見つかるんじゃないかな？」

意外と良いこと言ったんじゃないか、僕。

「なるほどな、面白いことは自分で見つけろ。つまらんことも面白くしろ。工藤、結構良いこと言うな」

うん、僕も思ってた。

「まぁ、僕が助言できるのはこれぐらいかな？あとは竹田が考えることだしな」

「おぉ、サンキューな、工藤」

さて、午後も頑張りますか。

7／12？（後書き）

フリースあったけぇぇぇぇぇぇ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7977y/

青春人類

2011年11月27日00時49分発行